

KD86  
133

柳太舞踊の民謡





KD86  
133

# 優良百貨常潤に澤

お買物は……



上野  
銀座

松坂屋  
松坂屋

## 松坂屋のお廉い理由

- 一、現金仕入れを本位とし、一枚の手形をも發行せざること
- 一、主として生産者より直接に大量仕入れを行ふこと
- 一、社債、借入金如き負債を有せざること
- 一、極力冗費を節約すると同時に利益率を低くすること

# キリンビール

民謡は郷土の  
麒麟は麥酒



麒麟麥酒株式會社

80W37923



第八回 郷土舞踊と民謡 序目

第一部

祭頭ばやし

茨城縣

白太鼓をどり

六調子 十六日唄

熊本縣

船唄

北海道

棒踊

オハラぶし 其他

鹿兒島縣

休憩

風流ミハンヤ舞

茶山唄

福岡縣

朝鮮の豊年踊

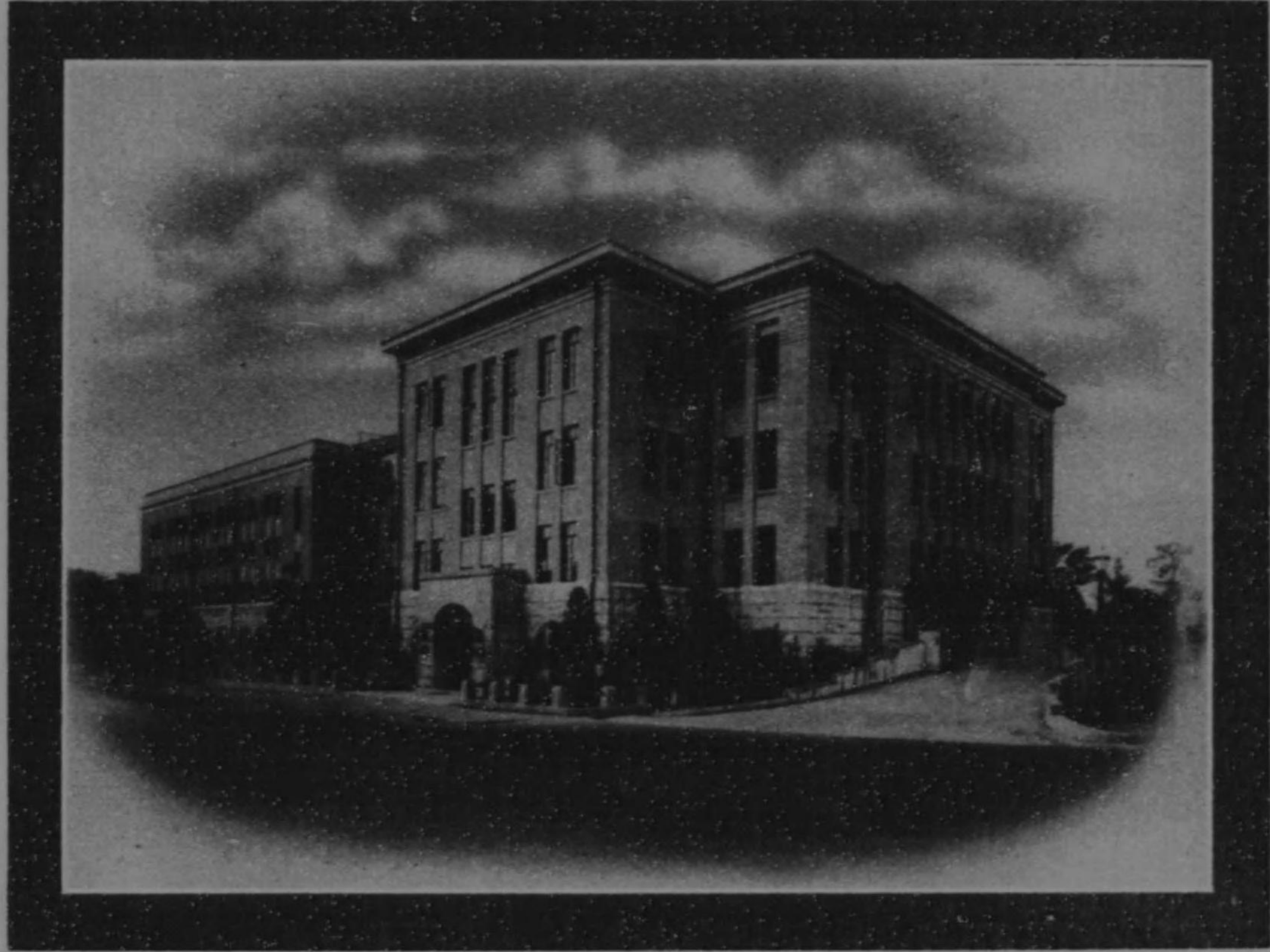
朝鮮

豊年をどり

田植唄 麥打唄

群馬縣





館年青本日

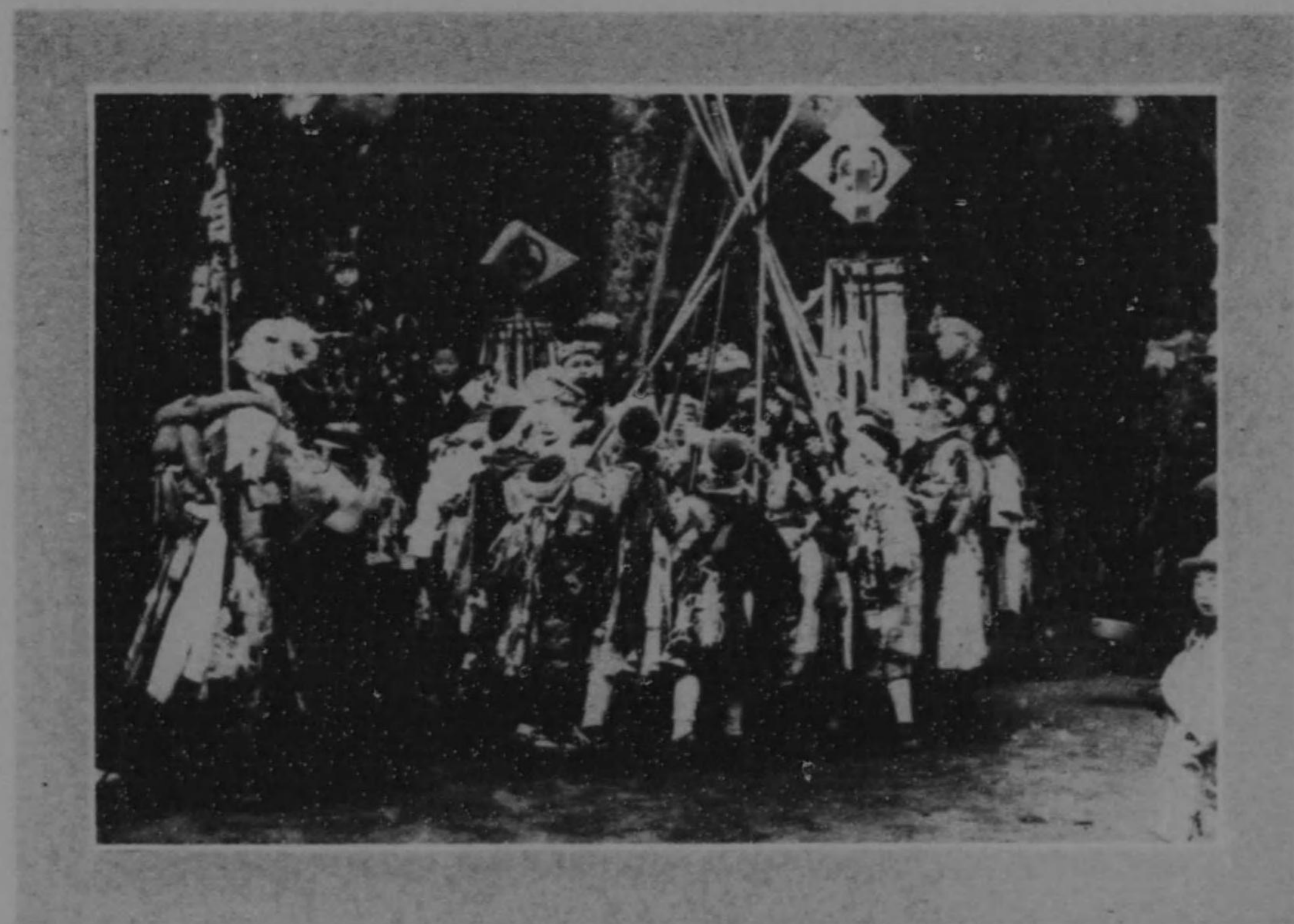
祝  
第八回全國鄉土  
舞踊民謠大會

東京日日新聞





りどを鼓太白



しやば頭祭





踊 棒



唄 船





踊年豊の鮮朝



舞ヤンハと流風





りどを年豊

## 祭頭 ばやし

茨城縣鹿島郡高松村・中野村

### 一 鹿島神宮の春まつり

常陸の鹿島神宮の春祭を祭頭さいとうと呼びまして、天武天皇の御代に始まると傳へ往古は二月申の日、後世神宮寺に於て涅槃日、維新後に神佛混淆を禁ぜられてから昔に返つて二月上の申の日、近年新曆三月九日と極めて執行されるものであります。年々の祭日に翌年の當番の村を二つ神占に依て定め、これを左方右方と分けます。神宮の北は上、南は下と云ひ、上下に幾多の村があつて、その中から祭頭の村が選ばれ、翌年の祭りに奉仕します。その祭りの意味は、上古の神軍を象るとか、防人さきもりとして西國に出陣する人の出發の祭りであるとかの解釋もあります。サイトの名義は明らかではありません。

### 二 其日の有様

さて祭りの當日、當番の兩村では七八歳の少年に甲冑を着せ、これを祭頭さいとう新發意しんぱつぎと名をつけて、大人が肩車に乗せて大將に擬し、前には旗幟を立て、左右に警固の人が武装して守ります。續いて當番の村の若者みな兵卒となり、その近い村々の若者も助祭頭と云つて加はつて、左右各々三百人、乃至五六百人が、異なる服装で鹿島神宮に参詣します。兵卒は下着は随意、上着はナフトルの形付そろひ、帯は縮緬やメリンス、鉢巻を結び、紅粉を施し、幟や高張や鼓、法螺貝、檉棒を携えて脚絆、草鞋、甲斐々々しく乗込みますが、中には滑稽な服装をする者もあります。そして



隊毎に隊長が居て、甲冑いかめしく、法螺貝を吹き軍配を揚げて部下を指揮します。

そこで兵卒は一齊に聲を揚げて、「イヤ豊穂餘穂サ、アーヤレコラ御洒落目の毒、豊穂餘穂エー、イヤ、トホー、ヨホーサ、鹿島の豊竹、豊穂餘穂エー」と歌つて、これに合わせて貝を吹き、太鼓を打鳴らし、纏を振り棒を打合せて揉みあひ、また「ヤーラア〜〜〜」と、おめき叫んで進んでゆきます。そして左方右方と順に神庭に入り、大將は神殿で神酒を戴き、全軍を率ゐて神殿を一周してから各町を囃し廻り、夕方に一先づ終ります。夜に入つて遠近の村民が潮の如く集まり、幾千の提燈が社頭に亂れて、各當番村から納めた二臺の山車と、二本の大豊竹を荷ひ、祭歌を唱へつゝ假殿を廻ります。終つて神殿に莊重な太鼓が鳴りひびくと、さしもの群衆が水を打つたやうに静まり、そこに神職が出て、翌年の當番を指定して祭事は終りを告げるのであります。

### 三 出演者氏名

シホチ	内野 勉	附添	内野 平次	内野 よね
ウマ	野口巳之助	高穂提燈	大川寅次郎	戸上 鶴吉
太鼓	岩瀬 寅松	法螺	井澤 豊一	マトヒ振
囃子	高根 嘉久	高根 武雄	浦邊 茂範	宮崎 彦定
	宮崎 一郎	小神野 弘	野口佐之助	小川 兼吉
	大川 博	内野 親	小川 四郎	保立 春喜
	耳 金治	藤枝 操	坂本 伊司	鶴澤 保正
監督	東 常彦	宮崎 留吉		耳 新治

## 白太鼓踊

熊本縣球磨郡人吉町

——六調子、十六日唄——

### 一 九州相良の白太鼓

九州相良の白太鼓として世に聞えたものは、相良氏の祖先が豊臣秀吉の朝鮮の役に従軍し、凱旋の後に其の祝ひとして、また武道奨励の爲め起されたものと傳へられてをります。郡内各町村に一組、或は數組も現存する中に、今回出演の人吉鬼木組の白太鼓は、由緒深く、毎年春分に藩公に召されて上覽に供して居つたさうであります。維新後は各町村のそれが一時中絶の事もありましたが、鬼木組は其事もなく、定期の實演は今日はありませんが、夏の雨乞祭や、他町村よりの招きに應じ、郡内の大祭や祝賀會に出演して居ります。そして村の青年は十五歳に達すると踊組に入る習慣があり、技藝勝れた者は鐘打をし、二十歳以上に達し、太鼓の役に缺員を生ずると、その役に選まれ、理由なくして辭退は出来ぬ事になつてをります。毎年秋、練習を兼ね後進の養成をし、三十歳くらゐで退きます。

### 二 服装と踊りぶり

白太鼓の参加者は、着付は太鼓の役は男性的なもの、鐘の役は女性的なものを着、紺の股引、紺の脚絆、草鞋、足袋（太鼓は黒、鐘は白）。また鐘は赤熊の毛を冠り、太鼓は頭は角の、脇は鉄形の、鬘は鹿角の兜を冠ります。唄の役は羽織袴で出ます。踊手は白太鼓五人（頭一人、脇太鼓二人、鬘太鼓二人）、鐘打は五人、唄ひ手四人、旗手一人、他は



世話人五人を以て一團とし、鐘打は少年の役、旗手は幟を持ち、楽器は鐘と太鼓のみであります。

先づ行列を仕立て、囃しながら入場し、頭(白太鼓)と鐘、脇と鐘、關と鐘と云ふやうに二人づゝ出て踊り、これを一々頭の庭入り、脇の庭入り、關の庭入りと申します。次に唄入となり、四人の唄手が小さな輪を作つて中央に立ち、これを十人の踊子が輪を作つて取巻き、この外にカキと稱して假設の輪を作り、反對交叉して廻ります。次に中ぜきになり、頭、脇、關の順序で輪を作り、各三回踊り廻ります。次ぎにセリ合ヒとなり、カキを假設の敵と見なし、敵味方に分れ、追ひつ追はれつ踊ります。最後は引きとなり、後に太鼓、前に鐘と二列に並んでから三廻り進んだり退いたりして踊つた後、場を退きます。因みに踊場は二十坪ほどの空地で、別に特殊の設備はありません。

### 三 白太鼓の歌詞

お既の景を見てやれば 七匹既に駒立て、おなかにたちたるしのくろ

お、これほどの御嘉例を おくにがまえれば いたらふむ 關よりこなたに よもあらじ

ひいてのもの夜明けには 夜明けがたの横ぐもり

### 四 六調子

六調子は球磨の名物と云はれる民謡で、主として宴席で唄はれます。名の由來は不明、歌詞は

球磨で名所は(一番トモ)青井さんの御門 前は蓮池 櫻馬場 ヨイヤサー(郷社青井神社の事)

青井馬場から 薩摩瀬を見れば 殿の御縁に 鶴が舞ふ ヨイヤサー

こゝは西町 越ゆれば出町 出町越ゆれば 櫻馬場 ヨイヤサー

以上の唄は上の句を唄ひ終ると、下の句の三字を二度云つて、下の句に移る。例へば「前は、前は、前は蓮池」と唄ふ。乃至

はその代りにキタサイサイ、サイサイサと云ふ。

### 五 十六日うた

舊曆三月十六日には、御嶽参りと云つて市房神社に、新婚夫婦や未婚男女が参詣します。十五日、輕装して家を出て、その夜は山腹の神社にお籠りし、朝早く絶頂を極めて下山する頃は、持参の焼酎の酔も出て十六日唄を唄ひながら村に歸りますと、待設けた人々が出迎への慰勞の宴を張ります。十六日唄、一名御嶽参りは、かうした民俗から生れた唄ですが、最近が一番列車で人吉を立つと、その日に歸れるやうに便利になり、従つて御嶽参りの情調も遠からず薄れてゆくやうに思はれます。歌詞は

お嶽ご参詣と ドッコイ 内ちや云ふて出たが お嶽や名づけて 氣なぐさみ ナヨエー イマイマ、  
傘を忘れた 免田の茶屋で 空が曇れば 思ひ出す ナヨエー イマイマ

### 六 出演者氏名

頭 西山 塩見	關 上野 末治	西園 勝一	脇 上野 虎男	市野 寅男
鐘 阪本 光夫	上野 慶助	西山 八郎	市野 孝	上野 清人
唄 西園 長吉	圓田 覺治	石工 典在	樺木 一	廣手 鬼木 仁助
世話役 上野 芳三	穴童 藤造	市野 一三	上野 富吉	永田 虎喜
監督 高橋 敬止				



# 船

# 唄

北海道檜山郡江差町

## 一 江差の五月は江戸にもない

江差追分で名高い江差の港は、前に鷗島といふ島があるので、風波を避ける船が自然に集るほかに、こゝと福山と函館の三ヶ所の港に、松前藩が沖の口番所を設けて貨物の検印をしたので、ふだんから賑やかでしたが、幕末の頃は連年、鯨の大漁続きで、漁師は春一ヶ月の労働で一年の生活費を稼ぎ、江差として空前の繁昌を呈しました。漁が終つて大金が懐に入るのは、北海道に春がほんとうに訪れて、桃も櫻も一時に咲き誇る五月、人の心もおのづと浮立つ季節でしたから、江差目ざして諸國から商人が入込む、興行物が掛る、絃歌が湧くといふ人氣で、遂に「江差の五月は江戸にも無い」と唄はれるほどになりました。それは今では昔の語り草ですが、その大漁は、古い差網といふ方法の他に、當時新らしく用ゐられた建網といふ規模の大きく、従つて收穫も多い方法が、與つて力あつたのであります。この建網は元南部地方から傳はり、爾志郡三ツ谷村の阿部吉右衛門が、安政年間に採用したと申します。

## 二 幕末の漁獲法と作業唄

建網は梓船と起し船とを用意して、一定の海面に大きな網を建て、鯨が産卵の爲め岸近く群衆して網に入るのを待つて引揚げるので、わづか一夜でおびたゞしい收穫があります。いよゝゝ起し船に乗り組んだ二十人内外の屈強の若者が、だんゝゝに網を起してゆくうちに、鯨の乗りの多い時は、どうしても網が起きないので、その刹那に船頭が網

起しの切聲を張上げます。すると全員これに和して渾身の力と熱を傾倒して、唄に合せて網を起します。これが後には網卸しの祝ひや酒宴の席でも高唱されるやうになつたので、沖揚唄として有名なソーランは、鯨を梓船から汲みとる時の唄で、以上の唄は、江差の五月は江戸にも無いと云はれた安政年間の、北海道の漁業を彷彿たらしめるものでありませう。なほ船乗の服装は手拭の鉢巻、紺地の法被、晒布の腹巻に素足です。

## 三 歌 詞

### 一 船漕音頭 (出船音頭・歸船音頭)

船頭オーシコイ 船員オーシコイ 頭エンヤアイ 員オーシコイ  
頭エンヤドコイシヨ 員オーシコイホー 頭オツコイヨー 員オーシコイ  
頭今頃どこだ 員オーシコイ 頭江差の沖だ 員オーシコイ 頭もすこし踏んばれ 員オーシコイ  
頭若者元気で 員オーシコイ 頭一枚頼む 員オーシコイ 頭オツコイヨー 員オーシコイ

### 二 網起音頭

船頭ヤースンヨイサ 船員ヨイスヨイサ 頭イヤヨイサ 員ヨイスヨイサ  
頭ヨイスヨイサ 員ヨイスヨイサ (くり返し)  
頭ドーコイドツコイシヨ 員ドーコイドツコイシヨ 頭ヤードーコイドツコイシヨ 員ドーコイドコイシヨ  
頭ヤードーコイドツコイシヨ 員ドーコイドツコイシヨ 頭ドコイ／＼ドツコイシヨ  
員 ドーコイドツコイシヨ 頭ソレヤドコイドコイドコイシヨ 員ハードーコイドコイシヨ



### 三 切り聲音頭

頭ドドコーセノノツコトセーハー 眞ヨイヤーサン 頭ハーヨイヤサーア 眞エーエツヤーサー  
 頭ヨイトナー 眞ソーリヤーハーリヤ ハリヤ リヤ ドツコイヨイトコ ヨイトコナー  
 頭ヤーエー應へたも道理 眞ヤートコセー ヨーイナ 頭應へたも道理 千兩萬兩の金ちやものヨイトナー  
 眞ソリヤーハーリヤ ハリヤリヤ ドツコイヨイトコ ヨーイトコナー

### 四 沖揚音頭

頭ソラン〜〜〜 眞ハイ〜 頭沖の鷗に汐どき聞けば わたしや水鳥波に聞けチヨイ  
 眞ヤシヤ ソーリヤンアンサン ドコイシヨ ハードコイシヨ〜  
 練くるかと稻荷に聞けば どの稻荷もコンと鳴く (ハヤシ調省略)

沖の鷗が物いふならば たより聞いたり聞かせたり

沖の鷗の鳴聲きけば 船乗稼業はやめられぬ

江差山の上の 井戸の水のめば どんな年寄も若くなる

以上の歌詞は他國よりの輸入もあります。江差として古くは「アイヌの婆ツちや、長い煙管ではふらんヨイ、アイヌの爺ツちや、濁酒のんで酔ふたとセー」などがあるさうです。

### 四 出演者氏名

川道 喜策	笹森 長七	鈴木 幸藏	高野 民藏	中濱 幸吉
廣島 武八	新岡佐男三	休波竹太郎	新岡 駒藏	

## 棒

## 踊

鹿兒島縣日置郡田布施町

——オハラぶし、ハンヤぶし、シヨンガぶし——

### 一 鹿兒島名物

棒踊は鹿兒島縣下至るところの農村に行はれて、棒を持つて踊るので棒をどり、また最初の唄ひ出しが「後は山」と云ふのでオセロガヤマ、また氏神の御田植祭に踊るので御田をどりなどと、いろ〜に呼びます。また薙刀と鎌を持つて踊るのを薙刀をどり(鎌をギリトモ) 虚無僧姿で尺八を持つと虚無僧をどり、陣笠や三度笠を冠り、左に長刀、右に錫杖か竹笹杖を持つて踊るのを大刀をどりと申します。今回の田布施村尾下青年團が御紹介しますのは、青年組の棒踊(六尺棒)、薙刀をどり(鎌をギリ)、壯年組の大刀をどりで、青年組とは十五歳より廿二三歳までの二才と俗に呼ばれる年輩の者、壯年組とはそれより三十歳までの俗に三才と呼ばれる者です。

### 二 田布施の棒踊

棒踊そのもの、起原年代は分りませんが、尾下青年團所演のものは、藩政時代から今日に至るまで、金峰山神社の毎年五月六日の御田植祭に、天下太平五穀豊饒を祈るために奉納されてきたもので、當日は田布施郷の各部落から、十數組の奉納があつて、壯觀を極めます。一説に田布施村の棒踊は、今から二百五十年前に、こゝに鑛山の經營のあつた時に、その繁昌を祈つて神前に奉納されたと申します。縣下では昔から武士の子弟は土踊を、農村の子弟は



棒踊を稽古して、士氣を鼓舞して來ました。

### 三 棒踊の實際

さて出演者一同は、琉球耕の着物に角帯、白鉢巻、白袴、手甲、脚絆、草鞋のいでたちで、二列三列に隊伍を組み、まとひ持を先頭に練つて参ります。まとひは、長さ三尺に幅一寸餘の薄板の先きを赤く染めたのを、長さ數間の竹にまとひつけ、竿の上に長さ四尺に幅三四寸の板を纏いで、奉納金峰山神社 天下太平五穀豊穰、踊子一萬人尾下青年團と大書します。次ぎに踊り場に進み入るのをお庭入りといひ、神前なれば鳥居前で、唄手の唄に合せて踊子は定め席に就き、席定まると改めて唄ひ直し、此間に踊子は薙刀や棒を地に突き、まとひも一所に地に突いて、これを棒突きと申します。そして唄ひ手の一人が唄ひ擧げをすると、他の唄手が和して唄ひ、いよ／＼丁々發止と唄に合せて踊りが始まります。

### 四 棒踊の歌詞

お城の山は ソラヨイ 前は ハーソレソレ 大川(鹿兒島市の城山と、その堀を指す)

今こそ通るは 神に物語

清めの雨は ばらり／＼と降りとほる

焼野の雉子は 岡のせにすむ

### 五 民謡いろ／＼

日向の都城市外中之郷村宇安久のヤツサぶし(安久武士に通ず)が鹿兒島に來て、郊外伊敷村原良の名でオハラぶしと呼ばれたのかも知れぬと申します。ハンヤぶしと共に陽氣な男性的な唄。シヨンガぶしは、婚禮や落成の御祝儀に

唄はれる優雅な唄です。更に六調子と云ふ唄も追加します。(歌詞省略)

オハラぶし(ヤツサぶし)

やつさぶしなら尻高こつぶれエー 前の牟田田が オハラハー深ここさる

伊敷原良の巻揚の髪は 髪をゆたなら オハラハーまだ良かる

花は霧島たばこは國分 燃えて上るは オハラハー櫻じま

貴方とはつちこや 太鼓三味擔るて どこも日が照る オハラハー月も出る

ハンヤぶし

ハンヤエー ハンヤ／＼で今朝出た舟は どのの港へ サーマ着いたやら

ハンヤエー 踊れ踊れよ三十まで踊れ 三十越ゆれば サーマ子が踊る

踊子詞一例 京ぢや都ぢや御三家 薩摩ぢや島津家 假屋ぢや琉球人

寺の三助飯たけ飯しやこがれつけ ゆるいは爛なべ卵酒 はんべ取つた御焼酎

取つたいやつたいしほらつた所が のちにや酔くらつて あつちやいよろ／＼

こつちやいよろ／＼ ちえすつと 源之進

シヨンガぶし

うれしめでたの若松様よ 枝も榮ゆる葉もしげる ヤしよんがー

しよんが節なら鹽屋が元よ 東鹽屋がほんの元よ ヤしよんがー

佐多の岬のお庭の蘇鐵 花は咲かねど葉が兒事 ヤしよんがー



備考 以上の唄にゴツタンと稱する鹿兒島特有の板三味線と、十二夜待太鼓といふのを伴奏として用ゐます。

### 六 出演者氏名

指揮 二見壽太郎	鹿五六 巽	西中村幸夫	牧之内秀夫	寶樂 靜尙
踊手 大木下良充	杵 喜次郎	料所 泰治	下飯町國吉	諏訪園榮吉
北園 成孝	堀之口 聰	坂口 一雄	南 清己	竹之内 明
久保園純雄	皆廻 道則	久保園 勳	大久保邦夫	
小屋敷 等	野崎 一二	本園 泰造	北園 良武	
唄手 下拾石榮吉				

## 風流こハンヤ舞

—茶山唄—

福岡縣八女郡星野村

### 一 麻生地神社

星野村の中央、麻生山の中腹に火坑の跡といふ麻生地があります。昔は孫池、子池、四十八池と云はれましたが、今は埋没涸渇して減少しました。その大池は周圍八九丁、池中に竹生島あつて小祠を祀り、北の池畔に麻生地神社があり、早の時には雨乞ひの爲め参拜の者が多くて有名であります。こゝに毎年八月、今は九月の十五日に氏子が風流

とハンヤ舞を奉納する例が残つてをりまして、遠く南北朝の頃、征西將軍懷良親王當社に祈願を籠め、村人に舞はしめたといふ傳説があります。

### 二 舞臺と役々

星野村は下郷、横廻、中通、上郷の四組に分れ、多少その風を異にしますが、中通を例に取ると、上下を着た音頭二人、これは昔は村役人の役、シンポー（新發意？）は頭巾袈裟の姿、傘の中央を手拭で括つたのを左肩に擔ぎ、右に日月を描いた唐團扇の柄の長いのを持ちます。羽熊は二人、ハグマを冠り、兩手に撥を持ちます。また大太鼓を二つ釣つて、二人づゝ擔ぎ、舞臺の兩側に相對して立ちます。連四人、これは少年の役で、ハグマを冠り、胸に小太鼓をつけ、手に撥を持つ者二人、袈裟を着て、鉦と撞木を持つ者二人をります。他に伶人數名。なほ舞臺は元は置舞臺ですが、後には高さ三尺、三間と四間の石だゝみの舞臺になつたさうです。見物人は明治初年までは上下の別なく敷物を許されず、山の柴を折敷いて、その上に坐つたと申します。

### 三 風流

音頭二人先づ出て神前に禮拜、相互に禮拜して着座します。續いて鐘太鼓笛の囃子でシンポーが出て、呼び出しの形容をすると、ハグマとムラジが出ます。ハグマは大太鼓を打ちながら舞ひ、その中に神前に向ひ禮拜して發聲すると、伶人があとを引取つて謡ひます。それは中通は謡曲嵐山の「三吉野の千本の花の種うゑて、嵐山あらたなる、神あそびめでたき、この神」、他の三組は同じく謡曲猩々の「老いせぬや、藥の名をも菊の酒、盃も浮み出で、友に逢ふぞ嬉しき」です。かくてハグマ、ムラジ相對して、いろ／＼の舞となります。

### 四 ハンヤ舞



ハンヤ舞は上下を着た者が向合ひ、扇を取つて舞ふので、その種類も多く、毎回とりかへて御紹介いたします。歌詞も多いので、本書には一部のみ掲げます。

ハンヤ思ひの増すは誰故か〜 ハンヤ折々によそ心ある振見れば 添寐ながら心オント元なや  
ハンヤ思ひの増すは誰故か〜 戀しさにあたりの空を眺むれば 戀しき人の心オント聞はるゝ(思ひの増す)  
ハンヤ人目が戀の中垣〜 逢はで浮名の立田川〜 渡らで濡るゝわが袂 いかにせむ〜  
ハンヤ人目が戀の中垣〜 聲振立て鈴虫の 訪づればかり松虫の いかにせむ〜(人目が戀)  
ハンヤ忍ぶ心は味氣なや〜 月さへ隠す閨の内 ハンヤ忍ぶ心は味氣なや〜  
つれなの君は 見えもせず〜(忍ぶ心)

インヤ見たいものや日に一度 今日の日も早や見て暮らす〜 イヤ君に小田巻麻の糸  
心合せてよるばかり〜 イヤ長々しき夜が明けた 恨み申そ西東〜

イヤ今朝の夜明けの雲見れば 我もあの向き散りちりと〜(八調子)

鶯が花の穂すえに晝寐して 驚くたびに花がちる〜 アレハヨイヨイ コレハヨイ ソレハヨイ

ハツツク〜 イチ〜チャン〜ノヨイ イヨ戀しさに此方の空を眺むれば 夕暮は涙なる〜

イヨ十五夜の月の入るまで待ちつれど つれなの君はまだ見えぬ〜 アレハヨイ コレハヨイ(六調子)

ハンヤ肥前の國の内山は さいた在所でなければ 目につく千代女は只ひとり〜 ヤアラ見事

うしろ牡丹に前は梅 裾に散らしの花盡し 千代女の召したる帷巾 ヤアラ黄金鳴子を八つつけて

見よと云ひしよや 我君の〜 千代女土産は何々か 元結十八花ふうぞ 髪髪まで切添えて

それに千代女のおてきらす 明日は千代女の舟が出る 暇乞ひには出たれども  
あまり涙が繁くして 手やり目やりの暇乞ひ 目やりきまりの暇乞ひ(千代女)

ハンヤ四國舟〜 沖をば漕がで渚漕ぐ 靜かに押せや中乗りの船頭どの 足がしどろで船が船で押されぬ

ハンヤ堺舟〜 沖をば漕がで渚漕ぐ(以下同じ 四國舟)

### 五 茶山うた

茶山唄は茶摘み唄で、此の地方は茶の名産地としても知られてゐます。歌は

宇治の白茶と 星野のお茶は いとこ同志か 似てござる

縁がないなら 茶山にござれ 茶山茶どころ 縁どころ

茶山々々のぞんできたら 何の良かりよか 坂ばかり

### 六 出演者氏名

舞 井上 房吉	足立 政市	原田 清	西田 尙
風流管頭 井上 房吉	足立 政市	羽懸 長野 荒太	竹下 殿
連 竹下 住登	森松 正則	竹下 大藏	西 良明
シンボ 小西 慶介	轟 石橋 芳太	轟 西田 尙	轟 梅野 義夫
轟 竹下 重夫	轟 太誠 日野 敬夫	太誠 轟 原口 末吉	山口 真太郎
末崎 林蔵	山口 吉次		
栗管 栗秋 森蔵			



# 朝鮮の豊年踊

京畿道金浦郡  
陽東面登村里

## 一 豊年のをどり

これは主として中鮮と南鮮の各農村に弘く行はれる豊年のをどりで、傳説では明の時代に支那から移されたといひ、朝鮮では舊正月、農事の餘暇、耕耘終了の頃、また八月十五日頃を中心に、なほめでたい事のある折に行ひますので、男女合同の歌舞であります。而して今回は其の中の假面踊、舞童踊、農夫歌(田植唄)を主として、出來得るなら他の曲目も御紹介します。右の假面踊は本來の意味は不明ですが、巫女が面白可笑しく舞ふのを見て、村の老人が家族と共に誘はれて踊り出す様を現はしたと申します。舞童踊は武將、及び僧侶の服装を着た童子を肩車に乗せて踊るもので、朝鮮各地で有名のものであります。農夫唄は音楽に合わせて唄ひつゝ田植の振をするものです。

## 二 役々と樂器

舞踊の役々は、令座、舞童、下舞童、樂執等の名がわり、樂器は、カンメギ、ヂン、胡笛、長鼓、小鼓、法鼓、大釧、上釧、提琴、令旗、大旗等です。なほ唄は元より朝鮮語であります。

## 三 歌詞の大意

### 農夫歌(邦譯)

一 見よや農夫よ聽いて見よ 見よや農夫よ聞いて見よ 日落西山日は没し 月出東嶺だ月そびえ

二 見よや農夫よ聽いて見よ(反覆) 堯の日月舜の乾坤は 太平聖代これでないか

三 見よや農夫よ聽いて見よ(反覆) 士農工商職業中に 我が農夫が第一だよ

四 見よや農夫よ聽いて見よ(反覆) 民に火食を教へたのは 農事の外に誰がある

春夏秋冬が循環するのは 我が農夫の爲めである

五 見よや農夫よ聽いて見よ(反覆) 春に耕し種蒔いた後は 雨順風調が何より大事

夏には草取り秋には取入れ 父母には孝行 妻子を養はう

六 見よや農夫よ聽いて見よ(反覆) 到る處に呼子鳥は 春の消息を傳へる

巡つて來 巡つて來た 農事の時期が巡つて來た

七 見よや農夫よ聽いて見よ(反覆) 綠陰芳草夕陽の天に そよ吹く東風だよ

木三(除草具)を擔いで 月を見ながら村に入れば 兒等は喜んで迎へる

八 見よや農夫よ聽いて見よ(反覆) 歌はうよよ 農夫歌を歌はうよ

## 四 出演者氏名

令座(樂執ヲ兼) 劉再瑞

舞童 鄭一鳳	李圭鳳	趙南烈	趙尙俊	宋範成
劉金山	劉乙山	李景福	趙成善	李元山
樂執 宋嚴順	趙元興	金永中	宋洛眞	劉興順



# 豊年をどり

— 田植唄、麥打唄 —

群馬縣佐波郡玉村町

## 一 今と昔の八木ぶし

舊玉村町の總鎮守住吉神社の祭りは、毎年十月十七日で、その夜は村人が御籠りと稱して、夜を徹して神前で神酒を載き、思ひくの供物を捧げると共に、豊年を祝する老若の踊りが、夜明けまで賑やかに續く習慣が残つてをりました。そのをどりは時代と共に變遷があつて、近年は八木ぶしを用ひます。八木ぶしと云へば餘りに有名に過ぎて陳腐のやうに思はれますが、今まで知られてゐるのは、最近の踊りかた、唯しかたに止まつてをります。玉村町は八木ぶしの本場ではありませんが、一昔前の踊りが残り、縦樽のほか横樽の音頭も残つてをりますので、田植唄、麥打唄と合せて御紹介することにいたしました。

## 二 田植唄

申すまでもなく、田植の時に早乙女が唄ふもので、その歌詞は

玉村の 八幡様は イーヤーノ 何で暮く何で暮く 樽とさわら イーヤーノ こけら暮き

今日の田の 田主のお嬢さんは イーヤーノ まだ室で まだ室で 黄金の御簾を イーヤーノ 卷上げる

日照るとも 箕笠持ちな イーヤーノ 二宮の 二宮の根笹 根笹の露は イーヤーノ 雨と立つ

所では 高砂祝 イーヤーノ 鶴と龜 鶴と龜 此田の中で イーヤーノ 舞遊べ

## 三 麥打唄

夏の炎天下に農家の庭で、一家總出でクルリ棒を振りながら、刈つた麥を打つ唄で、土地に依り棒打唄とも申しま

す。歌は、  
赤城ナ 山から 雪風吹けば 麥もナ 盛に 青々ほきる

ほきてナ 手入は 百姓の勤め 手入れナ 届けば 黄金にみゆる

## 四 縦樽音頭

四斗樽を普通に据えて、音頭取が二本の撥で打ちながら唄ふもので、近年工夫され、人に知られた八木ぶしの唯しかたです。菅笠、花輪、傘などを持つて踊ります。歌詞は

### 國定忠次

聞いて忠次は小首を傾げ さらば之から喧嘩の用意 いづれ頼むと強者ばかり

頃は午年七月二日 鎖帷巾着込を着し 多勢すくうて境の町で

様子窺ふ忍びの人数 それと知らずに島村伊佐は 子分引連れ石切島へ

五人連れにて馴染の茶屋で 酒を注がせる銚子の口が もげて盃や微塵と碎け

けちな事だと顔色變へて 虫が知らすか此世の不思議 (以下略)

### 青物づくし

こゝに名高き青物盡し 苦勞しろ瓜氣はもみ瓜よ などや胡瓜で賣るのもよいが



顔も上げずに只眞桑瓜(中略)主は秋茄子東方漬よ 立てる思案が西瓜のやうで  
ぶらり〜とへちまのやうに 風に任してゐる奴はよいが それちや私の身がせうがない

踊子のはやし

揃つたよ〜 踊子が揃つたよ 稲のナー出穂より まだ良く揃つたよ  
今年やナ豊年 穂に穂が咲いて 寄せてナー黄金の アノ浪の花  
みんな揃つてヨ アノ取入れを 終へてナー こなして袋に入れて 積んだお米が アノ富士の山  
スットコ上州の玉村と 十五夜お月はまん丸い

五 横樽音頭

これは四斗樽を三つ並べて、三人で面白く叩くと云ふ、一昔前のやりかたで、踊は四竹や手拭を持つのもあり、輪  
を作つて飛ぶやうに廻る手踊もあつて、誠に愉快な郷土色横溢したものであります。歌詞は

國定忠次

上州名物長脇差と 音に聞えし國定忠次 こゝに名高き俠客ばなし  
國は何處よと尋ねて聞けば 國は上州アノ佐波郡 音に聞えし國定村よ  
そのや村にて一二と云はれ 田地畑家倉までも 人に優れた身分の人で  
親の名前は忠平と云ふて 二番息子が忠次でござる 生れついでての俠客肌で  
力自慢で武藝が好きで 人の爲めなら喧嘩もなさる そこで忠平忠告すれど  
意見空耳聞入れませぬ さらに是非なく見限りまして 地頭役所へお願いなさる

六 出演者氏名

あはれ勘當で無宿となりて今は憚る處はないと(以下略)

囃原 忠平	鴨田 豊吉	石川 政造	原 政剛	小島静十郎
鯉原 良作	神尾 瀧雄	原 梅太郎	原 忠平	鉦原 行雄
笛 長谷川保郎	横樽叩き 原 忠平	神尾 瀧雄	原 良作	
踊子 金子 章雄	白田 茂	原 勝美	渡邊 休作	鴨田 豊吉
白田 良平	原 三作	白田 初雄	小池 倉吉	原 梅太郎
石川 政造	小島キミ子	伊藤 ひこ	長谷川たみ子	町田かづ子
町田とみ子	加藤ろく子	町田キヨ子	笠原カツエ	山田たい子
白田クマ子	石原アキ江	小池 今子	町田イネ子	町田キミ子
堤 ミネ子	渡邊コメ子			
指揮 原 時敏				



後記

全國郷土舞踊民謡の會を將來如何にするか——といふ事よりも、先づ一日も早く全國を一巡すべきである。と顧問の柳田國男氏から豫て注意を受けて居たので、今回は是非夫を實現することに努めた。未出演地の縣當局も幸ひにその意を酌み萬難を排して出演するやう特に御幹旋下されたので夫等が全部出演つて臺灣と樺太を除く外兎も角名實の伴つた全國郷土舞踊民謡の會を茲に完成するに至つた。

この至難な事業をやりかけた本館としては是で一通り責任を果した譯で何となく肩の重荷が降りたやうな氣がする。之も一個に柳田國雄、高野辰六、小寺融吉諸氏の御懇篤な指導と地方當局の熱心な御幹旋に因るものと今更感激を新にせざるを得ない。

併し郷土舞踊民謡の會が之で終つた譯では勿論ない。一通り廻りはついたが、是を基礎として後世に恥かしからぬ實績を遺す爲には尙一段の研究と發展を必要とする。從て今後共一層各位の御支持を仰がねばならぬ。

猶地方に於て最も大衆的である舞踊民謡の粹を聚めた斯の會が創始以來既に十年を経過してゐるのに帝都に於ては未だ一般化しない餘あるのを遺憾とし、今年から東京日日新聞社が多額の犠牲を拂つて後援して下さる事になつたのは斯道の爲誠に欣幸に堪えない。茲に誌した同社に些か感謝の意を表する次第である。

昭和九年四月

日本青年館

昭和九年四月五日印刷  
昭和九年四月五日發行

定價金參拾錢

編輯人 神田海之助  
東京市四谷區霞丘日本青年館内

印刷人 白橋龍夫  
東京市京橋區西八丁堀四ノ四

印刷所 白橋印刷所  
東京市京橋區西八丁堀四ノ四  
電話京橋二八八六

發行所 財團法人日本青年館  
東京市四谷區霞丘明治神宮外苑

電話青山(四三三〇)四三六一  
三三三三、三三六六

近代人好み

美味しい  
洋食

階下

麒麟生ビールスタンド

市電青山四丁目電停前  
種長洋食部

電話青山(36)一三三六番

ラヂオ・電氣・板硝子  
電燈・電力工事請負

電氣蓄音機御利用下サイ

日本青年館御用

種長電機部

青山北町五丁目市場際  
電話青山(58)二四九五番

郷土舞踊土産

御菓子

東京市淺草橋



用御館年青本日

省線淺草橋驛前  
電話淺草三五六五番  
振替東京四七九二四番

建國團子總本店

原名つき入れ團子



菓子と喫茶



東京青山四丁目

日本青年館御用 青柳本店

電話青山 二四三〇三番  
二四五六番

青山明治神宮電停前

青柳喫茶菓子部

電話青山八三一番

九段遊就館内

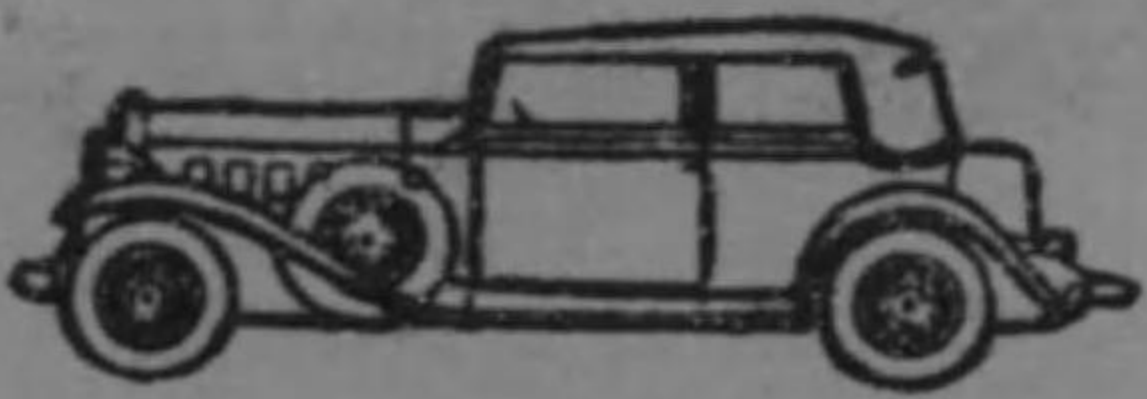
青柳喫茶食堂

電話九段一四四五番

當古口タクシーは最新式自動車のみを取揃へて居ります皆様御上京になりまして日本青年館に御泊りの節は是非御利用の程御願ひ致します

舊市内は一台壹圓で参ります  
尙團體市内見學其他時間乗の場合には特に御相談に應じます  
御用命の節は日本青年館宿泊部受付へ御申出願ひます

日本青年館御用



乗心地の善い、古口タクシーを御利用下さい

東京市赤坂區青山南町二ノ八

店主 古口國平

電話青山一三五四番

山葉オルガン特賣

景品 壹萬圓 空箱ナシ  
案内書進呈  
日本樂器會社  
東京支店 銀座七丁目  
横浜出張所 馬車道通



お子様のために  
御買求めの絶好期

最高正 確な 技の 術期

日本青年館御用 青山寫眞館

東京市赤坂區青山五丁目電停際  
電話青山四六〇五

日本青年館地下室に  
撮影場あり



多摩御陵參拜 東京市街道乘合自動車 電車連符切ハ

日本青年館年會事務所取次



新らしき

舞臺照明装置の

設計製作

劇場、活動常設館  
百貨店、學校  
會館等のホール及  
百貨店飾窓用

東京市芝區白金三光町二二五

丸茂電機製作所

電話高輪一五八二六一

活版と  
寫真版

白橋印刷所

東京市京橋區西八丁堀四ノ四  
電話京橋六八八二番



團方國カメ徴分優團  
團ツタ名勝会  
服旗旗ブル章旗旗

五十五町筋三北區草淺市京東  
〇〇四一七東振・五七五三淺電  
(前所留停町島小電市)

店旗野平

活 動 寫 真

映 畫

と

機 械

一町光三區谷四市京東

會 商 崎 野

番八九三四谷四話電



正しき國旗

明治三十一年一月二十七日  
 大政官布告第五十七號



縦横日直縦分  
 二(三)章徑ノ  
 五三

近江屋旗店

東京市神田區鍛冶町二丁目十八番地  
 電話神田一六三番  
 振替東京一〇三番

賜各宮家御買上之榮

東京市教育局御後援

(カタログ進呈)

●養老保險  
 ●利益配當養老保險

福德生命

本社  
 大阪市北區堂島濱通

東京支店

京橋區京橋  
 電話一六三三  
 橋詰一六三七  
 六三三七  
 七六五

●特殊養老保險

●勤儉生命保險

石瓦斯  
 コークス炭商

東京市芝區濱松町四丁目三ノ五

日本青年館御用株式會社 杉浦商會

電話芝一七三六  
 一三三七  
 四三三

品川出張所

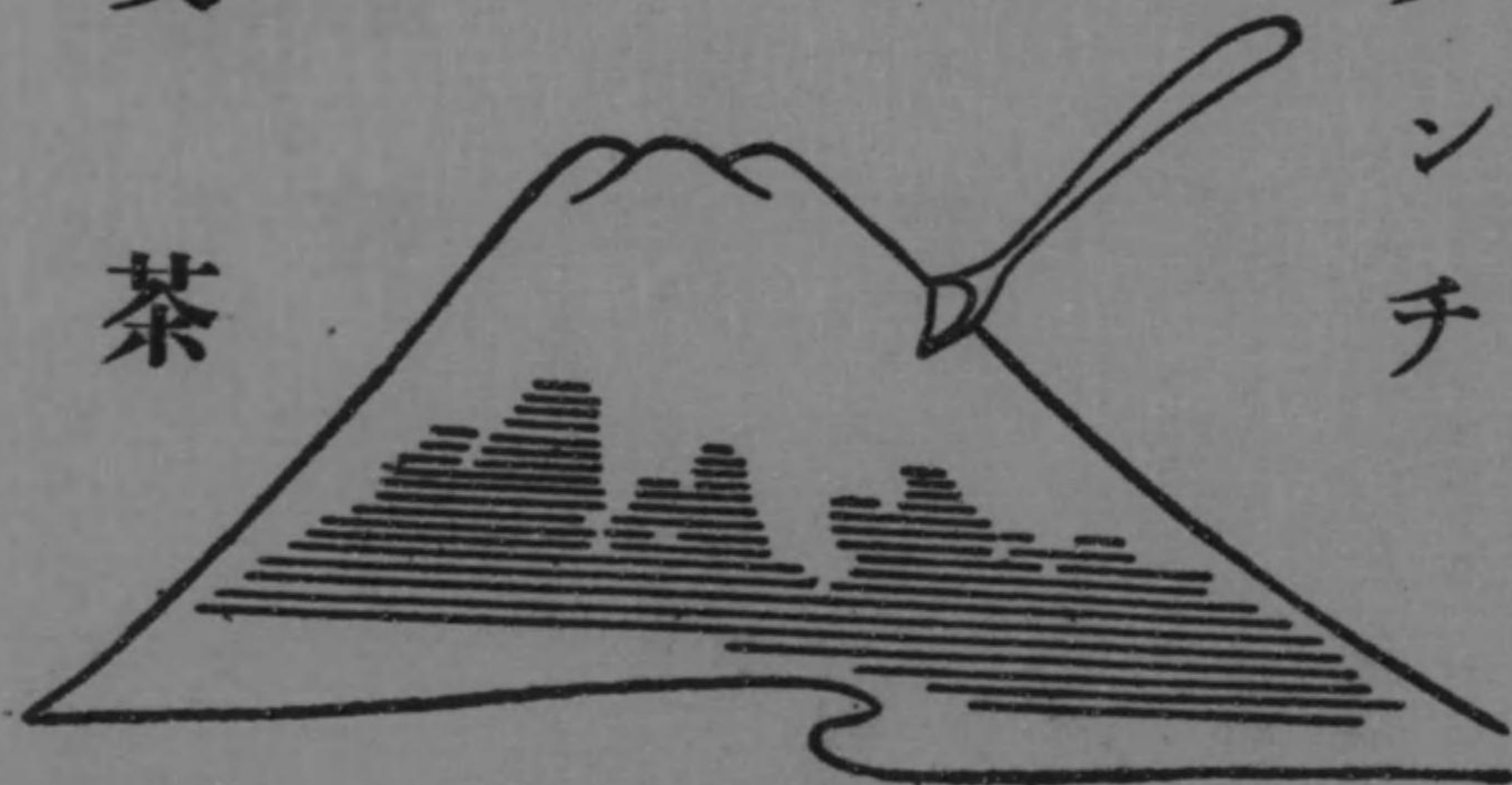
東京市品川區北品川二ノ一八  
 電話高輪一、〇二七

飯田町出張所

東京市龜町區飯田河岸十三號地  
 電話九段三、三三二  
 三、三三三

喫茶

ランチ



日本青年館地階  
 銀座 富士屋





メタル トロフキ カツプ  
佐藤製作所

東京市本郷区根津八重垣町65. TEL. 下谷3262.

神宮外苑日本青年館食堂

**大和亭** 岡本正次郎

電話青山三、一九五

東京市本郷區本郷壹丁目

**東京料理學校**

電話小石川六、一一〇

同 淀橋區壹丁目壹番地

**新宿ホテル**

電話四谷(七一五、九〇〇、一四八七四)

同 神田區須田町交叉點際

**牛鳥おの一本**

電話神田二、四三一

横濱市鶴見區

**花月園本家茶屋**

電話鶴見二一

静岡縣熱海町

**岡本旅館**

電話(五五四六五)

(其他同一經營店數十ヶ所)





DE  
9

春  
小  
宮





